劇場国家日本

「土曜寸言」020427

小泉内閣が発足して一年，政治が面白くなったと言われている．事実，テレビのワイドショー番組ではあれ以来政治に関するテーマが大幅に増えたという．そのため「ポピュリズム政治」と揶揄されたりもするが，人々の政治的感心が高まって，政治の質が高まるのであればそれはそれで結構なことである．しかし，どうもそうはならないのがこの国の政治風土だ．

クリフォード・ギアーツという文化人類学者は，十九世紀バリの政治統治機構を研究した．インドネシアのバリ島では王侯貴族によるゆるやかな専制政治が行われていたのだが，人々は実に自然にこれに治められていた．その形態を調べてみると，貴族達がめくるめく繰り出してくるヒンズーの宗教的祭祀を，民衆が熱狂的に「見ること」によって統治されてしまっていたというのである．ギアーツは，こういう統治の形態を「劇場国家」と名付けた．

日本もバリと同様「劇場国家」であり，「劇場国家日本」と言ってほゞ間違いないと，筆者は思っている．そしてこういう傾向は，東南アジア一帯に共通に見られ，同根の何かがあるのではないかとも思っている．

ところで，劇場に芝居見物にいく者にとっては，出演俳優が有名であればうれしい．だから，無名の者の出番は少なく，いくら才能があっても舞台にはなかなか立たせてもらえない．そういう土壌からこの劇場では世襲制が幅を利かす．反面，落ち目になったオリンピック選手やお笑いタレントなどがいとも簡単に舞台に登場できたりするのもこの土壌ゆえである．

「劇場国家」では，劇がスキャンダルめいてくるときが面白い．大物政治家が官憲に捕縛されるシーンなどは最高の見せ場である．

昨今の真紀子大臣と外務官僚との悶着，そこから派生した鈴木代議士の証人喚問と，追加公演辻元代議士の辞任劇などは，一億三千万人の観客を陶酔させた際物舞台だ．

「劇場国家」の政治の特徴は，観客と舞台俳優が截然と文節されていて，決して観客が舞台に上ることはないことだ．面白い芝居がかかっていれば見に行くが，面白くなければ全く無関心に陥る．所詮「芝居」なのだから，それがどんなに下手くそで，その結末が不本意であっても我慢するしかない．舞台に向かって座布団の一つも投げつければ溜飲は下がるというものだ．

実は，民主政治の本家である欧米でも，政治の劇場的性格はあるのだが，その舞台で政治家と民衆が対等に共演するところが違う．この国の劇場で，民衆が舞台に立つのは何時の日のことだろう．